

年末になぜ「第九」が演奏されるのか？

日本人がベートーヴェンを好きな理由は？



明治時代の小学校で

世界の文化と音楽コース

十河 和夫

1. 序

『ジャン・クリストフ』を高校時代に読んだ時から、ベートーヴェンに関心を持っていた。そのため、朝倉先生のベートーヴェンの講義は楽しみだった。ベートーヴェンは理想主義者であり、第九はフランス革命の精神である「団結」と「自由」が秘められているという話。そうか、ベートーヴェンは理想主義者か。でも、多くの日本人にとってベートーヴェンは、耳が聞こえなくなっ¹ても多くの偉大な作品を作曲した努力の人というイメージの方が好きだろうなと思い。年末に「第九」を演奏するのは交響楽団の餅代稼ぎにするためという話では、そんなこともあるのだろうなと思ったりもした。

本レポートは、朝倉先生の講義で疑問に思ったことを検証するために調べた結果であるつまり、楽団の餅代説を検証すると同時に日本人のベートーヴェンのイメージが誰によって作られたのかを検証するものである。

2. ドイツ音楽が席卷した明治時代の音楽教育

明治になって政府は西洋音楽を取り入れる必要に迫られる。そのため、1879年に東京藝術大学の前身である音楽取調掛を設ける。音楽取調係の初代講師は米国の音楽教育家メーソンであったが、彼は2年ほどで離日。その後、しばらく後任はいなかったが、1883年、かねてより海軍軍楽隊教師として滞日していたエッケルト（ドイツ）が、音楽取調掛を指導するようになる。この時期、生徒達はドイツ中心の音楽教育を指導された。

滝廉太郎、山田耕筰などがドイツへ留学し、小学唱歌²などを西洋音楽で作曲した。さらに、諸井三郎、島崎赤太郎など学校教育現場で活躍し、彼らはドイツ作曲家を中心に据えた音楽教育をしたので、日本の教育機関はドイツ音楽が偏重されるようになった。その、象徴が「楽聖」としてあがめられたベートーヴェンである。³

3. 白樺派などの知識人が賞賛した大正時代・昭和初期の時代

大正時代にはいると、白樺派の知識人がベートーヴェンを賞賛するようになる。それは、白樺派の教祖ともいうロマン・ロランがベートーヴェンを「楽聖」とあがめていた⁴ことが影響していた。多くの白樺派の作家、芸術家がベートーヴェンを賞賛した。武者小路実篤などは『友情』の中でベートーヴェンのデスマスクを登場させている。

白樺派以外の作家も西洋音楽には興味があったようで、森鷗外、夏目漱石、島崎藤村、などの作家もよくコンサートを聴きに行っていた。⁵

プロレタリア文学の宮本百合子でさえ、ピアノの恩師との思い出を「道標」で描いている。そのモデルとなった、久野久は和服で演奏し、盛り上がると、櫛は飛び、裾は乱れるという汗まみれのスタイルが評判だったらしい。⁶

日本最初の第九演奏は、第一次世界大戦で中国・青島（チンタオ）で捕虜になったドイツ人たちが、1918年6月1日に、徳島県の坂東俘虜収容所で行なった演奏だった。⁷

しかし、この時は収容所という限定された場所であったので一部の人だけが聴いただけである。それから6年後、1924年11月29日と30日東京音楽学校（後の東京芸術大学）第48回演奏会で、「第九」が初めて演奏された。演奏をしたのは、講師生徒あわせて200余名。

指揮をしたのはドイツ人のグスターフ・クローンであった。^{*8}

第二次世界大戦が激化して、コンサートも少なくなったが、細々と行われていた。そして、そこで演奏されたのは、結果的に同盟国であったドイツ音楽である。

1943年、太平洋戦争の状況が悪化する中、満20歳に達した学生へも徴兵令がくだり、その、出陣学徒壮行が東京音楽学校（東京芸術大学音楽部）の奏楽堂で行われた。その時演奏されたのがベートーヴェンの「第九」だった。彼らは入営期限を間近に控えた12月の初旬、繰り上げ卒業式の音楽会で「第九」の4楽章を演奏した。

3 マルクスト知識人と大衆が広めた昭和時代

太平洋戦争敗戦後の日本でどうして年末に「第九」が演奏されるようになったのか？

仮説その1：太平洋戦争も終わり、出陣学徒した多くの学生は戦死したが、生きて帰ってきた者達で奏楽堂の別れに際に演奏した「第九」を再び、ということになった。つまり「暮れの第九」の出発は戦場に散った若き音楽学徒への鎮魂歌（レクイエム）だった。

仮説その2：1947年、レオニード・クロイツァー指揮の日本交響楽団が12月9日、10日、および13日に演奏した。この演奏は成功し多くの客が入った。その後、日本交響楽団および後身のNHK交響楽団では毎年のように12月に「第九」を演奏している。「第九」をやるとお客さんが入る、これが楽団の餅代説である。

仮説その3：労働者による音楽鑑賞運動の推進役⁹である「労音」（日本勤労者音楽協議会）が初の「第九」公演が1954年（昭和29年）12月14日～22日の8日間にわたって東京労音により行われ、当時のN響による同時期の「第九」公演以上の聴衆を集めた。この後、平和運動推進の機運の高まり等もあって、このような「第九」への取り組みは「労音」の全国的な広がりと共に地方でもみられるようになり、今日見られる日本国内に於ける「第九」フィーバーにつながるものになった。

仮説その4：1960年代以降アマチュアの合唱団が「第九」を盛んに歌うようになってきた。このころ日本のアマチュア合唱団の実力は「第九」という難曲を歌えるほどに向上していた。合唱団の人たちも年に一度はこの難曲に挑戦してみたいと思うようになっていた1983年の年末に、大阪に1万人以上の合唱による「第九」が出現した。この1万人による「第九」が年末の風物詩にまで興隆を得た。

3 現在そして結論

年末の「第九」がいつまで続くのか？現在の所、当分は続くだろうとしか言えない。しかし、ベートーヴェンの方は「楽聖」の地位をいつまでも保持出来ないように思われる。それは、日本人の感覚が努力して立身出世するという物語が廃れてきたからである。

立身出世は、明治時代の物語であり現代では不可能に近くなってきている。難しい音楽より癒し系のモーツァルトの音楽が好まれるのも時代の変化だろう。

朝倉先生の年末「第九」説は音楽業界では有名な話であった。しかし、それだけが原因でなく、多くの要素が絡んで年末に「第九」が演奏されたのだろう。そして、その土台に日本人のベートーヴェン好きがあり、さらにベートーヴェンが「第九」に託した理想が日本人の心にぐっとくる物¹⁰があったからだというのが私の結論である。

参考文献

- 瀧井敬子著『漱石が聴いたベートーヴェン』中央新書 1735
鈴木敦史著『クラシック批判こてんぱん』洋泉社新書 036
江時久『ベートーヴェンの耳』ビジネス社
ツトム・ヤマシタ『偉大なる普通人 ほんとうのベートーヴェン』KB 社
ロマン・ロラン著 片山敏彦訳『ベートーヴェンの生涯』岩波文庫
木之下晃 堀内修著『ベートーヴェンの旅』新潮社とんぼの本
許光俊著『クラシックを聴け!』青弓社
五島雄一郎著『死因を辿る 大作曲家たちの精神病理のカルテ』講談社 文庫
武者小路実篤著『友情』 新潮文庫
ロマン・ロラン著 豊島 与志雄訳『ジャン・クリストフ』岩波文庫

-
- 1*ベートーヴェンは難聴だったが聞こえていたという説もある。
2*中田章作曲「早春賦」は、ベートーヴェンの K596 (春のあこがれ) を参考にして作曲されている
3*学校教育だけでなく、ドイツ軍方式を採用していた軍隊でもドイツ音楽が主流となっていたことも見逃せない。
4 彼は自分の不幸を用いて歓喜を鍛え出す。『ベートーヴェンの生涯』
5*その様子は森鷗外『藤棚』、夏目漱石『野分』などで表現されている。滝井敬子『漱石が聴いたベートーヴェン』
6*これは、寒い部屋でストーブもなしに、爪が割れ鍵盤が血まみれになるまでピアノの練習するような情熱がなければ、ベートーヴェンの精神が弾けない、というような日本人の好きな精神主義に酔いしれていたのだと私は思う
7*日本初の第九の演奏地 <http://www.city.naruto.tokushima.jp/contents/daiku/index.html>
8*満員の聴衆の中に寺田寅彦がいた。滝井敬子『漱石が聴いたベートーヴェン』
9*戦後のクラシック界をリードしたのが、山根銀二であった。彼は音楽にイデオロギーを持ち込んだ。「ベートーヴェンの生い立ちが物質的に恵まれぬ下層階級のそれであり、既成の財産や身分にとらわれることなく、むしろそれに対してこだわりのない批判的な態度をとることができるし、またそうせざるをえない境遇におかれていたことが、彼の成長にとって大きなプラスになったことは争えないのである」と『音楽美入門』に書いている。
10*それは、ドイツ人の方が強かったと思う。捕虜囚虜所で歌われ、ベルリン崩壊の時に歌われたのは、「フロイデン」ではなく「フライデー」の精神であったと思う。